

# 水のみやこの船大工

かつて木造運搬船が忙しく行き交った蘇州の運河には、運搬船の姿はなく、観光船が浮かんでいた。その運河にひとり静かに木船を造り続ける男がいた。



蘇州  
長江  
を行く



自分の形見に残したいと模型船を造る徐さん。約700年前の中国船を再現したもの



夏休みで帰省中の長男と船上で

「もう昔の蘇州の面影はありませんね。物を運ぶのもトラックの方が便利になり、船を使う水運業は衰退するばかりです」

そう嘆息するのは、船大工の徐海林さん(48)。「東洋のベニス」と呼ばれた蘇州でも、木造の船を建造できる大工はほとんどいなくなった。徐さんも時々、観光用の古い船を作ることはあっても、木造運搬船の注文は途絶えて久しい。この日は観光客の集まる寒山寺の船着場で、見世物用に再現された唐時代の船の修理をしていた。

「私は16歳になるまで、船の中で暮らしていたんです。親父は小さな船で

ぱりちよつと寂しい。私は家族に模型を残すことで、それを自分が生きた証としたい」という。

徐さんの家は蘇州の郊外にあり、周囲には運河や湿地帯が広がっている。網を積んだ小船が何隻も水辺に浮かぶ。ここには水郷の生活が残っているのではないかと、思ったが、そうでもないらしい。

「いま船を使うのはお年寄りだけ。小魚を捕って小遣いを稼ぐのです。若い人たちはみんな勤め人です。運河の水も汚れてしまつて、まるでゴミ捨て場のようです」

昼間、老人たちの姿が目立つ街を徐さんと散歩した。「運河がすたれてから、往年の活気はすっかり失われてしまいました。老人たちも船に乗るより、麻雀で時間をつぶす時代になったのです」

徐さんの長男は四川省成都の大学で電子情報学を専攻しているという。「息子に跡を継がせるといふ夢はないようにありません。水郷の生活は私の代で終わりですね」

徐さんはそう言うのと、穏やかな顔を少し曇らせながら、小さくため息をついたのだった。

野中章弘  
1953年兵庫県生まれ。アジアをフィールドに活字、写真、ビデオによるレポートを続ける。著書に「沈黙と微笑」「粋と絆」など。早稲田大学、東京大学講師。アジアプレス代表。



観光用に復元された唐時代の船。これも徐さんの作品

レンガや野菜を積んで上海まで運んでいました。毎日、毎日、冒険旅行をしているみたいな気分だった。あの頃は楽しかったなあ」

船を降りてから、船大工の修行に入った。当時はまだ蘇州にはたくさん木造船が行き来しており、腕のいい船大工はなかなか羽振りも良くて、粋

な職人のように見えたものである。不運なことに徐さんが一人前になったころ、船は鉄製が主流となり、船大工の出番はなくなった。

家の建築や家具作りで糊口をしのぎながら、徐さんは自分の腕の活かし方をいつも考えていた。ある日、偶然テレビでヨーロッパ人らしき外国人が

「蘇州の古い建物は大切に保存すべき価値がある」と語っているのを聞いた。「これだっ」とひらめいた。「昔の船を模型で再現したら、外国人に受けるんじゃないか」。今から8年前のことである。

以来、徐さんが作ったミニチュア船は50隻余り。素材も本物と同じ杉の樹皮を使い、外から見えない内側にも正確さにこだわった。その職人仕事に認められ、徐さんの模型は香港や西安など各地の博物館から展示用として引き合いがくるようになった。出品料は数万(1元≒約14円)。生活も安定したうえ、マスコミにも紹介され始め、蘇州ではちよつとした有名人となった。

ただ模型は絶対売らない。貸し出すだけである。「私の故郷では親が死んでも写真は飾らない。霊が家に残って気味悪く感じるのです。だけど、やつ